

【むだつかい】

作・藤田ヒロシ

○キャスト

私……………

母……………

カップ麺にお湯を注ぐ私。タイマーをセットする。

私 1974年・昭和49年8月30日午後0時45分、東京都千代田区丸の内で時限式爆弾が炸裂した。東アジア反日武装戦線「狼」による『三菱重工爆破事件』だ。その約3時間後、214キロ離れた静岡県引佐郡細江町氣賀で私が生まれた。

私 最初の合図は29日の午後9時半。素直に生まれていたら誕生は日付を越えなかったかも知れないが、何を思ったか母の中から出るのにそこから18時間もかかった。まるで決行日を二転三転させた「狼」の迷走ぶりの様で……と、言うのは流石に強引だ。彼らは最初に定めた9月1日が日曜日だったから平日に変えたに過ぎないし、私は何かを選べる立場になかった。死者8人、負傷者376人を出したテロ事件と3060グラムの赤子の誕生。この二つの出来事に繋がりは無い。飽きる程に繰り返されて来たありふれた景色の一つだ。

タイマーを確認する。

私 ん？いや「二つ」か……まあ、どちらにしろ私の人生もありふれた景色に溢れ、改めて話をした所で、皆さんにとってもありふれた景色の一つでしかない事でしょう。まあ、いいじゃないですか。そんな話にもお付き合ひ下さい。こうして久し振りに会えたのですから。

タイマーを確認する。

私 「ありふれた」と言いましたが、何も予定調和な人生だと言う事ではありません。どんなに「ありふれた」人生でもそれなりに想定外が起こります。例えば……そう『三菱重工爆破事件』の死傷者が「狼」の想定をはるかに超えたものになった事の様に……と、言うのも流石に違うか。彼らは8月14日に虹作戦を計画していたが、その前日に準備をしているところを正体不明の第三者に目撃され、これを中止。使用予定だった爆弾を8月30日に使用したのだ。この虹作戦とは昭和天皇が乗車した列車を鉄橋もろとも爆破しようとしたもので、そんな爆弾を市中で爆破させたらどうなるか？想定外ではなく想定が甘いというものだ。その程度で「革命」など起こせるはずがー嗚呼！

と、タイマーを手に取る。

私 進んでない！いや、むしろ逆に回っている。「想定外」……いや。

と、タイマーを手動で回し鳴らす。

私 このタイマーは一度、めいいっぱい回してから時間をセットして使用するものだ。回しが甘かった。

と、カップ麺を開ける。

私 頂きます。

と、食べる。(私は左手)

私 うん。

と、食べる。

私 伸びてる……。いいんですよ。「麺、柔らか目」が好きなんです。

と、食べる。

私 うん。

と、食べる。

私 嘘です。強がりです。

と、箸が止まる。

母 あらそう？私は好きよ。「麺、柔らか目」

と、食べる(母は右手)

母 え？「同じ箸」？いいじゃない親子なんだから。それともコロナが気になる？それは大丈夫。私もう死んでいるし。

間

母 笑うところ、なんだけど。

間

母 ま、いいわ。(口を拭き)皆さん、息子がお世話になっていきます。でも、皆さんもアレですね。この子の人生をお聞きになりたいなんて……本当に、アレですね。この子、末っ子でして、五つ上の兄と三つ上の姉がいるんです。この子、末っ子でして、まあそれは甘えん坊で、泣き虫で、いつも私の後ろに隠れている様な恥ずかしがり屋で……この子末っ子でして、サンタクロースの事を随分の大きくなるまで信じていて、「僕の靴下小さいからお父さんの貸して！」「煙突ないのに何処から入って来るの？」って毎年毎年大変で……って、あらやだ夏に冬の話。恥ずかー嗚呼、思い出した。この子は「雪が

見たい」「雪が見たい」って毎年毎年大変で。このあたりは雪降らないですからね。

と、笑う。

カップ麺を食べる（左手）

滅多に降らない雪が降ると、僕は決まって熱を出して寝込んだ。兄や姉が外ではしゃいでいる声を聞きながら、熱にうなされていた。

この子末っ子でして、身体が弱かったんですーって、末っ子、関係ないわね。（笑い）長男、長女と来て三人目。経験があったから、不安なんてなかったんですけどね。

と、カップ麺を食べる。（右手）

「大丈夫だとは思うが、念のために大きな病院で検査して貰って下さい」と、あの時木俣先生―掛かり付けのお医者さんね。言ってくれなかったら、この子は演劇なんてやれなかった。それどころか、サンタクロースも雪も知る事はなかった。かもしれないです。

と、スープを飲む。（飲み終えた時に箸が左手）

肺炎でした。

母 0歳の時に。それも二度も。

と、カップ麺を食べる。（右手）すぐに箸を持ちかえて、

身体が弱かったのはその為―なんて知らなかった僕は、父や兄のようにスポーツ能力が高くない自分を―

と、スープを飲む。（飲み終えた時に箸が右手）

一人でお絵描きするのが好きだったものね。折込広告見て、裏面に印刷がないものを集めて―

箸を持ちかえ、カップ麺を食べ、スープを飲む。

母 あら？食べ切っちゃたの？昔は「お母さんどうそ」って譲ってくれた、優しい子だったのね。

と、寂しそうに空のカップを覗く。

私 違うね。「お母さんどうそ」って言ってもアナタは「食べていいのよ」って返す。僕にはそれがわかっていたから「どうそ」って言ったんだ。僕は自分が「弱い」存在でいる事で構ってもらえると―そうで

母

ないと構ってもらえないと知っていた。
寂しい事いうのね。せっかく拾った命じゃないの。誰かとなんて比べないで、もっと好きに使えばいいのに……。

と、容器を片づける。

私がタイマーを見つめる。

私

「拾った命」……その使い方をずっとわからないままで、此処まで来てしまった。

（何かに反応するように）まあ演劇は続けてるよ。でもそれだって何かを成し遂げたとは――

（何かに反応するように）成し遂げたいでしょ、そりや――

（何かに反応するように）「生きてるだけでマル儲け」なんて、そんなの綺麗事って言うかさあ――

（何かを制するように）ちよつと待って。

間

私

そういう事か。医者言葉と紹介状。それで繋がった。「拾った命」

間

（何かを制するように）ちよつと待って。待って――（うつつとしそ
うに）なに？

（何かに反応するように）「意味と理由」？少し思ってたよ。何か使
命があるんじゃないかってね。少しだよ、少しは。

（うつつとしそうに）なに？「医者は命を救うのが仕事」「親は子供
を育てるのが仕事」……だから？

間

私

それが「意味と理由」って言いたいなの？違うって。僕が言っている
のは自分自身にとっての――

（何かに反応するように）そういう事？（笑う）そういう事か。そ
うだよ。そういう事だよ。僕じゃないのよ。

間

私

これが「拾った命」なら、それは誰が拾い、誰の手に？この命は誰の物か？そんな事、いい歳して子供じみてまず？まあ、そうですね。それってやっぱりアレですか？絶対的な正解のない事を考えても意味がない。時間の無駄だからって事？効率的に、合理的にっていうのがこの社会。でも私、何処かへ出かけたら、同じ道を通って帰りたくないというか…：遠回りしたり、迷い道したり、「無駄」が好きなんです。生きる為に必要不可欠な事だけをしていても「生きてる」感じがしないんです。おかしいですか？

(何かに反応するように) アナタの子供だからね。アナタの出来なかった分まで「無駄」しますよ。だから――

母

ちょっと待ちなさい。自分のしている事を正当化するのに私を持ち出さないでよ。それは確かに幼い時から実家の旅館の手伝いをさせられて「無駄」は少なかった。親の決めた人と結婚させられそうにもなった。でもまわりの反対を押し切ってアナタのお父さんと結婚して、そこからは思い描いた人生とは全く違う景色の中を、山あり谷あり、そこそこ長いトンネルも進んで…：だからアナタの分なんて残ってないの。アナタはアナタでやりなさい。

私

わかっているよ。

母

わかっているよ！私だって、自分がまさかアルツハイマーに――

私

わかっているさ！残りは3分かも知れない。「人生100年時代」を真に受けて、まだ半分以上残っているなんて信じてはいない。「無駄」をサボる無駄な時間はない。

私

と、タイマーを手にする。

3分だろうと50年以上だろうと…：想定の内も外もない。昨日と似た夕日は見られるが、同じ物は見られない。明日は夕日が見られるかはわからない。そう「わからない」。いっだって「初めて」に向き合い続け、だから「無駄」も重ねる。でもその「無駄」は誰かにとっての「必要」かもしれない。その人の「必要」はあの人にとっての「無駄」かもしれない。この世界には無駄なものはない。この世界には無駄なものしかない。そんなありふれた景色の中で「拾ってもらった命」を…。

と、タイマーを回し、

私

確かな事はたった一つ、どんな命でも等しくいつか必ずゼロを迎える。ありふれた景色。これに限って逆戻りは無い。出来ればその瞬

間まで「無駄」を楽しみたい。

(何かに反応するように)えっ?「それにしても無駄が多すぎる」?
(笑って) もう一個、シーフードがあるけど食べる?

と、去る。

チツチツチツ……タイマーの音が響く。

F
I
N